神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

『ドン・キホーテ』の人物像に関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Matsuda, Yuko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/999

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

氏　　名	松田　侑子
本　　籍	兵庫県
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第２９号
学位授与年月日	２０１２年３月２３日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項に該当 【昭和２８年４月１日文部省令９号】
学位論文題目	「ドン・キホーテ」の人物像に関する一考察
審査委員	主査　神戸市外国語大学教授　西川　喬
	委員　神戸市外国語大学教授　福嶌　教隆
	委員　神戸市外国語大学准教授　野村　竜仁
	委員　関西大学外国語学部教授　平田　渡

１．論文内容の要旨　……　２０

２．論文審査結果の要旨　……　２２

１．論文内容の要旨

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラの『ドン・キホーテ』は、1605 年と 1615 年にそれぞれ前篇と後篇の長編小説として発刊された。　セルバンテスが前篇の序章で述べている様に、この小説は、当時の流行であった荒唐無稽な騎士道小説を批判するために書かれている。

しかし、実際にセルバンテスが成し遂げたのは、単なる娯楽小説などではなく、二人の主人公ドン・キホーテとサンチョ・パンサの複雑な特徴、つまり二面性を描くことであった。

ドン・キホーテは単なる狂人ではなく、正気な部分を持った「正気とも狂気ともつかない人物」として描かれている。普段は有徳の人物なのだが、騎士道物語や騎士道精神、そして思い姫ドゥルシネーア・デル・トボーソに話が及ぶとその正気を失う。　彼は中世騎士道物語で用いられていた古語を用い、曾祖父の甲冑を身につけ、冒険に出かける。　しかしながら、近年、ドン・キホーテが実は狂っていないのだと主張する研究者がいることも事実である。

これらの研究者は、ドン・キホーテが常に第三者の目を気にして舞台に上がっている役者なのだと主張した。役者稼業に憧れていたという発言をしているし、また、「狂人になる」という、おおよそ狂人には相応しくないことを口にしているからというのが根拠である。しかし、ドン・キホーテの凶暴性や妄執、または一貫性の欠如からドン・キホーテが狂っていないというのはどうも疑わしい。

サンチョ・パンサもまた、こうした両面性（彼の場合は「曖昧さ」といえる。　サンチョの特徴の１つは曖昧さだと言われてきた。）を有している。　愚鈍でありながら、ときには知恵の長けた人物として描かれ、野心を持つにもかかわらず信心深いキリスト教徒として登場する。

また、ドン・キホーテに対する態度も一様ではなく、見捨てようと考えたり、見捨てまいと決心したりと、場面に応じてサンチョのパーソナリティーは変化していく。　さらにドン・キホーテからの影響によってもその曖昧さを発揮する。　当初は現実をありのままに受け止めていたが徐々に感化され、魔法の存在を認めるようになる。　また、超日常的なことに脅える臆病さとそれに立ち向かおうとする勇敢さなどをあげることができる。

また、前篇と後篇で題材も大きく異なる。　つまり、前篇では、ドン・キホーテの狂気に焦点があてられ、周りのものがその狂気に驚きあきれるというパタンであったが、後篇になると、ドン・キホーテの狂気は弱まっていき、代わりに周囲のものが、彼の狂気に染まっていく。

そして、ドン・キホーテの狂気に最も感化されたのは、従士として終始冒険を共にしていたサンチョ・パンサである。

サンチョは当初、近所に住む「善良な」農夫として描かれていた。　野卑な愚か者で、無学なおしゃべり、大食漢でずる賢いという典型的なピカレスク小説の主人公のような人物として、読者の目には映っていた。　しかし、後篇になると、それらのサンチョの特徴にも変化が生じてくる。　サンチョは次第に「教育」されていく。　サンチョの変化はドン・キホーテにとっても明らかなもので、作中でドン・キホーテはサンチョに「お前は日に日に愚かでなくなっている」と言っているほどである。

サンチョがドン・キホーテの影響を受け、思想や言動を真似ることは、研究者のあいだで「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」と呼ばれている。　この現象は多岐に亘っており、「教育」されていくことを始め、騎士道精神が芽生えたり、魔法の存在を信じたり、また現実を歪曲させたりすることなどを挙げることができる。　研究者によって、その範囲は多少異なるものの、「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」を主張する研究者たちは一様にこの現象を認めており、この点に関して、異論はない。

さらに、この現象の研究により、別の現象を認める研究者たちがでてきた。　その現象は「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」と呼ばれている。　ミゲル・デ・ウナムーノが『ドン・キホーテとサンチョ・パンサの生涯』の中でこの現象を認めて以来、相互影響や「似た者夫婦」の理論を持ちだし、この現象が存在することを研究者たちは説明し始めた。　たとえば、サルバドール・デ・マダリアーガ、牛島信明はこの説を支持している。　しかし、果たしてドン・キホーテのサンチョ・パンサ化は起こっているのだろうか。

ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化の根拠として、支持者たちは①ドン・キホーテが後篇の後半になり同じ諺を繰り返し用いたこと、②ドン・キホーテの狂気が弱まっていることを挙げている。　諺に関して言えば、一時的な影響でしかなく、ドン・キホーテがこのような行為に至ることは２度しかない。　また、ドン・キホーテの「衰退」を、サンチョ・パンサ化とみなすことについては疑問が残る。　ドン・キホーテの衰退の原因が、鈴木正士の主張するように、ドン・キホーテがもはや非騎士道物語世界を騎士道物語世界に変換することができなくなったために「衰退」したのだとすれば、ドン・キホーテの「衰退」は、サンチョ・パンサ化などではなく、俗人化に過ぎないからである。

サンチョ・パンサのドン・キホーテ化は、多岐に亘り、その影響も持続している。　しかしながら、ドン・キホーテサンチョ・パンサ化については、支持者たちの根拠も２つしかない。さらに、１つは一時的な影響でしかなく、もう１つもサンチョからの影響によるとは言えない。

それでは、なぜサンチョ・パンサのドン・キホーテ化が起こったのに対し、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化は進まなかったのだろうか。　原因は、ドン・キホーテではなく、サンチョ・パンサにある。　なぜなら、サンチョはドン・キホーテを「模倣すべき対象」として認識していたからである。　つまり、二人の関係を見れば、ドン・キホーテのほうがサンチョ・パンサより教養のある人物だと分かる。　その意味ではドン・キホーテはサンチョより優れており、サンチョはドン・キホーテを模倣し、その影響を多大に受けた。　他方ドン・キホーテにとっては、騎士道物語の主人公たちこそが自分にとって「模倣すべき対象」であり、彼らからの影響が極めて大きいため、わざわざ下僕であるサンチョを模倣（模倣については本論で詳しく見ていく）する必要はないのではないだろうか。

このように、近年、多くの研究者が認めてきたサンチョ・パンサのドン・キホーテ化を考察し、検討したところ、この現象が確かに起こっているということが確認できた。

新たに一部の研究者たちが「相互作用」ということばを用いながらドン・キホーテのサンチ

ョ・パンサ化を提唱している。しかし、サンチョ・パンサがドン・キホーテ化しているというのと同じほどの影響力がドン・キホーテのサンチョ・パンサ化ということばに見いだすことができず、２つの現象を同等に扱うことはできないと思われる。